

2022年10月30日聖霊降臨後第21主日説教

イザヤ書 1章 10-20 節

テサロニケの信徒への手紙二 1章 1-5, 《6-10》, 11-12 節

ルカによる福音書 19章 1-10 節

今週は、11月を迎えます。11月1日は諸聖徒日です。2日の諸魂日と並び、毎年教区の墓地礼拝の日ですが、今年も中止となりました。残念ではありますが、それぞれ教会でのお祈りを大切にしたいと思います。

さて、本日の旧約日課は、「イザヤ書」の冒頭部分です。福音書は有名な、徴税人ザアカイの物語です。時代も内容も異なる両者に、共通したテーマがあります。それは、悔い改めること、あるいは主なる神様に立ち返るということです。しかし、両者は背景となる時代も状況も異なりますので、それぞれの内容に触れながら、そのテーマを考えていきたいと思えます。

本日の「イザヤ書」の箇所は、11節に「**お前たちのささげる多くのいけにえが、わたしにとって何になるのか、と主は言われる**」と書かれている通り、主に神殿祭儀に対する批判が書かれています。預言者イザヤは、南北に分裂したイスラエル王国の中で、主に南のユダ王国を舞台にして活動した預言者です。それ故、ここで批判されている対象は、エルサレムにある神殿とそこで行われる神殿祭儀です。主なる神様が命じた神殿祭儀ですが、それを主なる神様ご自身が喜ばないということです。これはおかしい話ですが、その理由は、その行為が形だけになっていたからです。また、13節に「**むなししい献げ物を再び持って来るな。香の煙はわたしの忌み嫌うもの。新月祭、安息日、祝祭など災いを伴う集いにわたしは耐ええない**」とある通り、その背景となる様々な祭日や週一度の安息日までも批判の対象になっています。なぜならば、主なる神様がイスラエルに求める大切な事柄とは、17節にある「**善を行うことを学び、裁きをどこまでも実行して、搾取する者を懲らし、孤児の権利を守り、やもめの訴えを弁護せよ**」ということであるからです。それらを怠ったままの神殿祭儀は、形だけに他ならないのです。

さて、神殿祭儀とはそもそも何かと申しますと、主なる神の民であるイスラエルの人びとが、主なる神様に対して、感謝する時、何かを願う時、あるいは罪の許しを願う時、主なる神様に犠牲を献げることです。その起源は、カインとアベルに遡ります。またそれは、個人、家族、部族、王国など、人の集まりの大きさに関係なく、イスラエルの人びとが、主なる神様に対して行うべきことです。本来は、場所の限定はなかったのですが、王国の確立とともに、エルサレムの神殿に場所が確定しました。

神殿祭儀は、主なる神様に対する意味があるだけでなく、人間に対する意味も持ちます。それは、自分が主なる神様を信じていることを人々の前に

公にするということです。つまり神殿祭儀は、それを行うのが個人であれ、集団であれ、自分たちがどの神様をどのように信じているのかを、公にすることに他ならないのです。

しかし、この公にするという要素は、形だけ主なる神様を信じている、ということをしてしまう場合があります。そして、定められた通りに、神殿祭儀を行っていることが、不信仰を隠してしまうこともあるのです。あるいは、自分の不正義や悪なる行動を、正当化することへと結びつくこともあります。17節にあったような批判を、神殿祭儀の実施が相殺してしまうということです。また、より広い政治社会的意味では、アッシリアなど強い国々との力関係に頼っている状態を、神殿祭儀の実施が主なる神様に頼っているかのように装ってしまう場合もあります。様々な意味での信仰の表明としての神殿祭儀が、不信仰をごまかすために機能してしまっているということです。これは、単に主なる神様を信じないということとは異なります。本質は不信仰なのですが、神殿祭儀が繰り返される限り、形の上では信仰的に見えるからです。

主なる神様は、そのような信仰の在り方、あるいはイスラエルという王国の在り方を見過すわけでもありません。本日箇所、預言者イザヤの言葉を通して、厳しい批判を語ります。その意味では、イザヤが任された預言活動は、各個人、王国内の事柄、それらを超えて、国際情勢をも含めた、王国・国家の在り方に関わる行動でした。

このイザヤの神殿批判は、イエス様の神殿に対する批判と類似するところがありますが、少し異なっています。イエス様も、祈りの家ではなく、強盗の巣となってしまった神殿に対して強い批判をしました。しかし、イエス様は、王国という枠組みを超えて、人間という存在そのものが、主なる神様に対してどのように向き合うかということを経験としました。それは、先週の福音書の譬えに描かれていたように、自分は徴税人ではないことを感謝し、倫理的に正しく、律法を守っていることを誇り、そして神殿祭儀もしっかりと行っているような人をも、イエス様は批判しているからです。そのような思い上がったあり方は、イザヤの批判とは異なるにしても、主なる神様に対しても、人間に対しても、間違っているからです。

イエス様は、悔い改めること、あるいは人間が主なる神様に立ち返ることとは何か、言い換えれば信仰とは何か、そのことを示すために、今病で苦しんでいる人、あるいは差別され悲しんでいる人、そのような一人ひとりと出会いました。それは一見、預言者イザヤが、王国・国家を相手にしていることと比較すると、規模が小さい事柄のように思えます。しかし、先に見た「イザヤ書」においても、「善を行うことを学び、裁きをどこまでも実行して、搾取する者を懲らし、孤児の権利を守り、やもめの訴えを弁護せよ」（イザヤ1:17）という表現がありました。一人ひとりを大切にすること、それを抜きにして、悔い改めも、主なる神様に立ち返ることも語ることができない

のです。どんなに規模が大きなことに関わったとしても、誰かが一人が軽んじられてしまっただけでは、主なる神様の方を向いたことにはならないからです。それ故に、そのことが福音書の物語にも関わります。ザアカイがイエス様を一目見たいと願ったと同時に、イエス様ご自身も、ザアカイと是非とも出会わなければならなかったのです。

さて、ザアカイについて少し触れてみますと、彼は徴税人です。当時、ユダヤ王国は、ローマ帝国と同盟関係にありましたが、ローマは同盟国からも税金を徴収します。但し、徴収行為自体は、相手国の人間にその仕事を依頼し、ローマの官憲は直接集めません。そこで、その国々で徴税請負人が雇われます。いわゆる下請け作業です。ザアカイはその仕事をしていたと思います。ただし、この税金徴収の仕事には一つのメリットがあります。それは大きな収入を得られる可能性があるということです。徴税人は、自分の集めた税金から自分の取り分を受け取るのですが、ローマにとって、定められた税金が納められることが重要課題であるため、実際に徴税人がいくら集めたか、あるいはどのような方法で集めたかは、関係ありません。それ故、よほどのことがない限り、ローマが背景にある徴税は、全てが正当化されます。余計に税金を取ることは、不正と言えませんが、ローマにとってはしっかりと定まった税金が納められれば、それは正しいことなのです。

税金の徴収は、それだけでも憎まれる存在ですが、ザアカイは、ローマという異邦人のために働き、異邦人と触れ合うということから、同胞のユダヤ人から、宗教的にも民族的にも、そしておそらく感情的にも嫌われていたと思います。しかし、どんなに嫌われたとしても、誰かがその仕事をしなければ、ローマ帝国は維持できません。また、ローマ帝国とユダヤ王国との同盟関係も維持できません。すなわち、ザアカイの働きがなければ、ユダヤ王国という主なる神様の王国も成り立たないのです。

ザアカイは、ローマ帝国という人間の理性に基づいた支配体制、そして律法や神殿祭儀をという神様の権威に基づいた支配体制、その両者が重なり合う場所にいました。力や文化が交わる最前線ともいうべきでしょうか、そこで働く人でした。それはまた、二つの文化や価値観が対立しあい、両者からの批判を、受ける存在でもあったと思います。ことに同胞からは、ローマの官憲にも、神殿の祭司たちには向けることのできない批判を、彼は向けられていたと予想されます。今日的な視点でも見ても、かなりストレスのかかる仕事です。

そのようなザアカイが、イエス様の存在を知った時、彼を一目でも見たいと思った理由を物語は記しません。そのような自分の在り方から脱却したいと願ったのこともかもしれません。もしそうだとすれば、それはザアカイ個人の願望ともいえますが、彼の立場を考えますと、人と人とのあってはならない関係からの脱却、そして神と人とのあってはならない関係からの脱却を願ったのことに他なりません。それゆえ、ザアカイが、イエス様と出会い、自

分の歩む方向を変える決心をしたことは、単純に、自分の行為を反省したというだけではありません。またストレスの多いつらい仕事を辞めたいと思っただけでもなく、人間が本来、主なる神様に対してあるべき姿、他者に対してあるべき姿に戻りたいと願ってのことであるといえるのです。

ザアカイの物語は、悔い改めた人間としての姿として有名です。しかし、それは、単に罪ある状態から神様を信じるようになったことを評価しているわけではありません。この物語にあるのは、いつの時代においても起こりうる、神と人と、そして人と人との関係の回復の物語に他なりません。理性的に定められているが人を苦しめている税制度、主なる神様の意思として定められているが人を苦しめている神殿祭儀や律法順守、それらがもたらす関係からの回復です。ザアカイの決断とは、そこからの回復のために、イエス様の教えの通り、主なる神様を愛することと、隣人を愛することは一つである、それを実施し始めようとしたことにほかならないのです。ザアカイは、「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します」と、宣言します。この言葉は、その愛を始める具体的な宣言です。主よと呼びかけ、隣人に関することを誓っているからです。

ザアカイの物語は、「イエスは言われた。『今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。』」（ルカ 19：10）という結論で終わり、彼が救われたことを宣言しますが、その後彼がどのように歩んだかを記していません。彼は実行できなかつたかもしれません。自分が稼いだ以上に誰かに返すと言っているからです。また彼がその後、徴税人をやめたのか、あるいは正しい徴税人になったのかもわかりません。この物語が示す事柄とは、悔い改めるとは何か、主なる神様の方向を向くとは何か、という方向性だけです。しかし、だからよいのです。なぜならば、ザアカイによって示された方向性は、現代の私たちにとっても、それが課題であると提示されるからです。

悔い改めること、主なる神様の方を向くこと、言い換えれば主なる神様を信じること、その歩みに完成はありません。各個人の人生の終わりはありませんが、主の教会としての歩みの完成はありません。もし、その完成があるとすれば、この世界全体が主なる神様の「良し」とされた世界に戻ることであるからです。しかし、その完成を目指しながら、その方向性を持ち歩み続ける集まりが主の教会です。その歩みを、わたしたちは、わたしたちの教会を通して、これからも続けたいと思います。今まであった大切なものを守りつつ、しかし、新しい事柄を始めつつ、未来に向けてその歩みの大切さを示し続け、伝え続けていきたいと思います。そのような歩みを続けるわたしたちを、主なる神様は喜んでくださるのであり、また愛を持って受け入れてくださるのです。